

『案じますな、今じゃ：ひとり暮らしの高齢者26人の語り』

香川大学教育学部 教授 上杉 正幸

私はこれまで、健康を重視する現代社会のパラドックス（矛盾）を分析し、健康とは単に身体的に異常があるかないかという問題ではなく、生き方の問題であると論じてきました（『健康不安の社会学』世界思想社）。この問題意識の先で、身体的な衰えを抱えた高齢者がどのような喜びや悲しみ、願いや不安を持ちながら生活しているのかを知りたいと思い、ひとり暮らしの高齢者を対象にして面談を続けてきました。この本は、26人の高齢者（77歳から93歳までの女性19人、男性7人）への面談をもとに、年をとるとはどういうことかを探った本です。

高齢者の生活について書かれた本は多数ありますが、その多くが研究者の視点から見た高齢者論になっています。それに対して、私はこの本を、高齢者のことは高齢者に聞こうという姿勢で書きました。したがって第一章では、さまざまな過去の出来事、衰えた今の生活、そして死を意識せざるを得ない未来への想いについて、26人が語ってくれた生の声をそのまま掲載しています。

そして、第二章では高齢者の生活の特性を、第三章では高齢者福祉のあり方を論じていますが、筆者としては、読者のみなさんにまず第一章を読んでいただいて、それぞれが自分の親を想い、あるいはいつか高齢者となる自分自身を想って、第二章、第三章を構想していただければと願っています。

衰えた今だけを見ると、高齢者は助けを求める弱い存在と映ります。しかし、高齢者は突然に年をとったわけではありません。80年、90年の長い人生のなかでさまざまな経験をしながら年を重ねてきたのであり、その経験の積み重ねの先で今を生きています。そのことに目を向けて高齢者に人生の物語を聞くと、高齢者がたくましくて穏やかな存在であることに気づきます。そして、高齢者から多くのことを教えられ、また、高齢者を見守るための新たな視点が浮かんできます。

この本は、高齢者のみならず、他の世代の方々にも読んでもらいたいと願っています。「案じますな、今じゃ」という言葉は、すべての世代の人々に響く言葉だと思います。

